

感情形容詞述語の関係成分について： 源氏物語にみられる「うれし」の場合

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1994-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 光浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1480

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



感情形容詞述語の関係成分について

—源氏物語にみられる「うれし」の場合—

吉 田 光 浩

I はじめに

古代語の形容詞述語文の構造が考えられるとするならば、そこには属性形容詞・感情形容詞など、形容詞のカテゴリーの相違にしたがって、それぞれおまかな異なりがみられ、さらに個別の語によつて細かな違いがみられるものと推察される。ここでは、感情形容詞述語の文構造を明らかにするための用意として、それとして異論の生じないであろう「うれし」を対象としてその表現に必要な関係要素について考察を試みることにする。このような、範疇の典型と考えられる語について検討しておくことが、感情形容詞述語構文のすがたを捉えるための近道だと考えるからである。

II 感情形容詞「うれし」の成分の種類について

中古の和文形容詞述語の文構造について論及することは、容易ではない。ここでは、現代語にみられるような、格助詞により明示される論理関係よりも、係結びによる断続関係が卓越するからであり、また、とりわけ和文の場合には句と句

の連接關係が、緊密ではなく、一義的に解釈できない場合もみられるからである。しかも形容詞の場合には、終止法の例よりも、連用法や連体法などの例が實質的には多く用いられていることや、文の終止にある程度関わる部分に用いられた場合でも、「うれしと見給ふ。」「うれしく思ふ。」のような知覚・思考動詞句によって終止を完了する例が多いことなどの理由から、実際の形容詞述語の關係成分といえるようなものが抽出できるかといえ、甚だ消極的にならざるを得ない。

したがって、本稿において述べる形容詞の關係成分は、従来の文の成分の定義よりもかなり緩やかな基準で考えている。それらのなかには、構造上形容詞に後続する「思ふ」「おぼす」「みる」など動詞述語句の直接的な關係成分とみるべきものであって、感情形容詞とは、単に意味のうえから關係性を指摘し得るに留まるような要素や、論理の展開上、間接的にのみ形容詞表現の発現に関与する要素なども見出だされる。また、中古の和文には、和歌に典型的にみられるように成分間の關係に二義性を帯びる場合や、物語文にみられるような会話・心中詞・地などの文体が融合して文を形成する場合も見受けられるが、ここでは、そのような例も含めて「うれし」を中心にそれと他の要素がどのような關係として分析し得るかという観点から論を進めてゆきたい。したがって、たとえ成分間の關係が多様に分析されとしても、説明を及ぼさなかつた關係を否定するものではないことを予め断わっておきたい。

1 (感情主体)と(感情誘発句)

感情形容詞の關係成分には、従来から述べられてきたような、現在を表すいきり断定表現の場合に人称制限をもつ「感情の主体」と、いわゆる「感情の対象」を挙げることができるが、中古和文の用例を詳しく調べてみると、この他にも、その感情の成立に密接に関与するいくつかの成分を考へることができそうである。以下、『源氏物語』『枕草子』など中古和文の例文をもとにそれらについて考察してゆく。

A【中納言(薫)は】、【(姫君が) 独り臥したまへるを】、【心しけるにや、と】うれしくて、心ときめきしたまふに、
やうやう、あらざりけりと見る。
△源氏 あげまき▽

例文は、薫が手引きを得て宇治の姫君達の寝所に忍び込む場面であるが、今、ここにみられる形容詞「うれし」を中心に、その感情成立に与る成分を求めてみると、そこには、「うれし」が表現されるに至るまでに必要な、いくつかの要素が現れていることがわかる。まず、「うれし」と感じる感情の主体は、「中納言は」により示されていると言える。また、「独り臥したまへるを」で表現されている部分は、「うれし」という感情を誘発し、あるいはその契機となる事態を示している。したがって、この例文では、「うれし」に着目すれば、その感情の主体を表現する句と感情を誘発する事態を示す句が、関係成分として表現されていると言ってもよいであろう。もちろん、それらの関係成分は、「うれし」に続いて表現された動詞述語句「心ときめきしたまふに」にも収斂する要素であるとしても、同時にそれらの成分が「うれし」の発現に関係する要素であることは、否定しがたいものと考えられる。ここでは仮に、「中納言は」のような部分を〔感情主体〕、「独り臥したまへるを」のような部分を〔感情誘発句〕と呼んでおく。これらは、従来から感情主体と感情の対象として考察されてきたものである。このうち、感情誘発句には、「うれしき御声かな(源氏物語 あさがほ)」「うれしきをり(同 たけ川)」「観音の御験うれし(同 てならひ)」などのように、体言の形式をとる場合や、後の例文Nで述べるように、独立文の形式をとる場合なども見受けられる。このようなものを、ここでは、それぞれ感情誘発語、感情誘発文と呼んで、感情誘発句のバリエーションのひとつとして捉えることにする。

また、感情誘発句(文・語)については、次例Bのように、地の文と会話文が融合した文の場合、会話中の形容詞に後続する感情誘発語【仰せ言】が、先行する地の部分にみられる【く】などのたまへば】を内容的に受けている例も散見される。

B 源氏【「あやしきことなれど、幼き御後見に思すべく聞こえたまひてんや。」などのたまへば、】(僧都)「いとうれしかるべき【仰せ言】なるを」とすくよかに言ひて、△源氏物語 若紫▽

ここでは、「うれし」の関係要素を求めるといふ本稿の目的上、このような例を、感情誘発句と感情誘発語をふたつながら有する文として捉えておくことにする。(感情誘発句)の形式は多様であるが、Bの例にみられるように、条件句△―バ▽の形式が多く見出だされる。

2 (感情内容句)

この他に、先の例文Aでは、「心しけるにや、と」のような部分についてもその関係成分として考察する必要があるものと考えられる。源氏物語中に用いられた「うれし」が同様の句を伴っている類例には、次のようなものを併せて、一六例を数えることができる。

C 親(明石入道)たちも、【かかる御迎へにて上る幸ひは、年ごろ寝ても覚めても願ひわたりし心ざしのかなふと】、いとうれしけれど、あひ見で過ぐさむいぶせきの、たへがたう悲しければ、△源氏物語 松風▽

D 中の宮はげにいとさかりにて、うつくしげなるにほひまさりたまへり。御髪などすましつころはせて見たてまつりたまふに、世のもの思ひ忘るる心地して、めでたければ、人知れず、【近おとりしては思はずやあらむと】、頼もしくうれしくて、今はまた見譲る人もなくて、親心にかしづきたてて見きこえたまふ。△源氏物語 あげまき▽

C・Dの【】部分はいずれも、感情形容詞「うれし」に対して、 \wedge ウレン \vee と感じたその未分化な感情の内容について、一層詳しく分析的に説明する句となつていてと考えることができる。また、これらは、引用句「 \sim と」をその基本形式としており、その句中には、多くの場合において「心しけるにや」のように情意的色彩の濃い心中詞の表現がみられる場合が多い。ここでは、このような、成分を仮に「感情内容句」と呼んでおく。感情内容句は、他の感情形容詞述語文にも散見されるが、主に情態的意味で用いられる形容詞には現れない。したがって、感情内容句は、感情形容詞の範疇を明らかにするための重要な手掛かりとなるものと考えられる。以下、比較的、感情形容詞述語による終止文が多くみられる『枕草子』から、他の感情形容詞の類例を二、三挙げておく。

Eにくきもの　くきしめく車にのりてありく者。【耳もきかぬにやあらんと】いとにくし。　 \wedge 枕草子　二八段 \vee

Fあさましとわらひさわぎて、　几帳ひきなほし隠るれば、　頭の弁にぞおはしける、【みえ奉らじとしつるものをと】いとくちをし。　 \wedge 枕草子　四九段 \vee

G「空さむみ花にまがへてちる雪に」と、わななくわななく書きてとらせて【いかに思ふらんと】わびし。

\wedge 枕草子　一〇六段 \vee

H（齋院ハ）かれにたてまつりておはしますすらむもめでたく、けだかく、【いかでさる下衆などの近くさぶらふにか、とぞ】おそろしき。

\wedge 枕草子　二二三段 \vee

このように、「おもふ」「おぼゆ」などの動詞述語がみられない感情形容詞の終止法による文中にも現れる例が散見されるところからも、この要素は、十分に感情形容詞の関係成分としての資格をもつものと考えてよいであろう。

3 (状況説明句)

また、感情というものは、ある誘発事態があれば、必ず当該の感情が誘発されるといふものではない。例えば、「赤い靴」「小さなかぼちゃ」「広い公園」のような、色彩や空間次元などを表す形容詞と比較する時、その属性の主体となるそれぞれ「靴」「かぼちゃ」「公園」などに接した場合に（存在を認識した場合に）、それらの色・おおきさ・ひろさなどについて述べる場合は、おおむね変ることなく「赤い」「小さい」「広い」などの表現が半ば恒常的に誘発されるものと考えられるが、感情形容詞の場合には、それとは異なる様相を呈するものと考えられる。例えば「客が来た」という誘発事態に対して、感情主体が「ちょうど無聊をかこっていた」場合には、「うれしい」といふ感情が誘発されるであろうし、「仕事が詰って忙しい」場合には、「わずらわしい」などの感情の誘発が想定される。また、「悲しくてやり切れない孤独を感じていた」場合には、同じ「うれしい」であっても、より強くその感情が表現されることもあるであろう。その客が友達の場合と気のおける人の場合でも誘発される感情は異なってくるものと考えられ、千差万別の感情の成立が予想される。したがって、感情形容詞が用いられる場合には、色彩形容詞や次元形容詞などのような、より客観性・恒常性の高い概念に対応する語とは異なって、主観性・流動性が高くなり、それだけに誘発事態が成立するにあたって前提的に用意された、場面を限定する要素を必要とする場合が多いようである。

I うれしきもの　く遠き所はさらなり、【おなじ都のうちながらも隔たりて、身にやむごとなく思ふ人のなやむを聞き

て、いかにいかにと、おぼつかなきことをなげくに、【おこたりたる由聞くも】、いとうれし。

△枕草子 二七六段▽

例文では、「おなじ都のうちながらも隔たりて、身にやむごとなく思ふ人のなやむを聞きて、いかにいかにと、おぼつかなきことをなげくに」によって前提的な状況が説明されている。そして、その状況下で「おこたりたる由聞くも」という感情の誘発事態に接して、「いとうれし」という感情が発現されると考えられる。このような部分は、構文上、直接感情形容詞と係り受け関係をもつものではなく感情誘発句を介して形容詞と間接的に関係を結ぶ文相当の要素であるので、「成分」として捉えないことが普通であるが、この前提状況が誘発される感情のあり方を左右すると考えられるため、ここでは「関係要素」という程度の意味において、「成分」と呼んでおくことにする。

丁人聞かぬ間に（小君ヲ）呼び寄せたまひて、（薫）「あこが亡せにしいもうとの顔はおぼゆや。今は世に亡き人と思ひはてにしを、いとたしかにこそものしたまふなれ。」と、まだきにいと口固めたまふを、【幼き心地にも】、【はらかならば多かれど、この君（姉）の容貌をば似るものなしと思ひしみたりしに、亡せたまひにけりと聞きて、いと悲しと思ひわたるに】、【薫ガ】かくのたまへば、うれしきにも涙の落つるを、恥づかしと思ひて、「を、を」と荒らかに聞こえぬたり。

△源氏物語 夢のうき橋▽

例文は、薫が小君を浮舟への使者として遣わす場面である。小君が「うれし」という感情を抱くのは、「姉が亡くなったと聞いて、ひどく悲しいと思ひ続けていた」という前提的に用意された状況下で、薫からもたらされたその生存の情報により誘発されたからであろう。それゆえに嬉しさもひとしおのものとなる。このように「はらかならば多かれど、この君の

容貌をば似るものなしと思ひしみたりしに亡せにけりと聞きて、いと悲しと思ひわたるに」のような感情が誘発されるための前提状況を説明する部分を、ここでは〔状況説明句〕と呼んでおく。以下、先に述べた例と同様に、分析すると「かくのたまへば」が感情誘発句になり、「かく」は、内容的に「今は世に亡き人と思ひはてにしを、いとたしかにこそものしたまふなれ。」を受けていることになる。

この場合の〔状況説明句〕は、その内部構造に目を向けると感情形容詞「悲し」を中心として、さらに同様の分析が可能となる。すなわち、「悲し」は、「はらからは多かれど、この君の容貌をば似るものなしと思ひしみたりしに」を〔状況説明句〕としてその状況下において感情誘発句「亡せたまひにけりと聞きて」が発現され、その結果「いと悲しと思ひわたる」という感情が成立するものと考えられる。したがって、この例文は、次のように二重の文構造に分析される。

状況説明句

〔(状況説明句) + (感情誘発句) 〓 感情形容詞〕 + (感情誘発句) 〓 (感情形容詞)

状況説明句の形式は多様であるが、基本的なものとしては例文 I・J のような \wedge — \vee 形式の他に、 \wedge — \vee の形式も多くみられるようである。

H (花散里) 【つきづましくうしろむ人 (夕霧) なども、事多からで、つれづれにはべるを】 (後見ヲ頼マレルコトハ) うれしかるべきことになむ」とのたまふ。
 \wedge 源氏物語 玉かづら \vee

4 (一心地(三七))

この他、さらに、検討を進めると、例文 J にみられるような「幼き心地にも」と同様の要素が感情形容詞「うれし」と

共起する例文をいくつか見いだすことができる。

Kさて、五六日ありてこの子率て参れり。こまやかにをかしとはなけれど、なまめきたるさましてあて人と見えたり。
召し入れて、いとなつかしく語らひたまふ。【童心地に】いとめでたくうれしと思ふ。

△源氏物語 はつき木▽

L齋宮は、【若き御心地に】、不定なりつる御出立の、かく定まりゆくを、うれしとのみ思したり。

△源氏物語 さか木▽

Mこの御方（浮舟）も、【いと心細くならはぬ心地に】（母中将ノ君ト）たち離れんを思へど、いまめかしくをかしく見ゆるあたりに、しばしも見馴れたてまつらむと思へば、さすがにうれしくもおぼえけり。

△源氏物語 あづま屋▽

形容詞「うれし」を含む文中に共起するこのような要素は、「童心地に」「若き御心地に」「いと心細くならはぬ心地に」など、「く心地ニ（モ）」という表現形式をその典型とする。これらは、L・Mが、感情主体「齋宮は」「この御方も」を明示したうえで表現されているところからも、感情主体を表現するところにその存在意義を認めるべきではない。むしろ、（感情主体）成分において説明し得ない主体のおかれた立場や精神状態を表現し、「く」の立場にあるくの精神状態にある」という主体の属性を表現する要素となっているものと考えられる。ここでは、このような要素について、（状況説明句）の場合と同様に「関係要素」という意味で「成分」と呼んでおく。源氏物語の「うれし」では、上記のものも含め

て、一〇例がこの要素を有する用例として考えられる。

以上、感情形容詞「うれし」には、〔感情主体〕〔感情誘発句〕〔感情内容句〕〔状況説明句〕〔心地ニ(モ)〕などの関係要素が存在することを指摘したが、もちろん、これらのすべてが、必ずしも「うれし」を含む文中にすべて現れるとは限らない。文章中に溶解し、表現上特定しがたいこともありうるし、次例のように、前後の文中で説明されていることも少なくない。

N【九月十日のほどなれば、野山のけしきも思ひやらるるに、時雨めきてかきくらし、空のむら雲おそろしげなる夕暮、宮(匂宮)いとど静心なくながめたまひて、いかにせむと、御心ひとつを出でたちかねたまふ。】〔薫ハ)をり推しはかりて参りたまへり。「ふるの山里いかならむ」と、おどろかしきこえたまふ。】いとうれしと思して、もろともに誘ひたまへば、例の、ひとつ御車にておはす。

△源氏物語 あげまき▽

匂宮が、宇治を訪れることを決心しかねているという状況説明があり、そこに薫が折よくやってきて宇治訪問を誘う、という誘発事態が生起する。このことによって「いとうれし」という感情が成立するものと考えられる。ここでは〔状況説明句〕〔感情誘発句〕のいずれもが「うれし」を含む文に先行する文中に現れており、しかも、〔感情誘発句〕は二つの文によって示されているものと考えられる。このように「うれし」を含む文中に、これらの関係成分がみられず、先行(稀に後行)する文章中にそれらの成分が現れる場合も多い。

この他にも、関係成分として考察すべきものや、〔状況説明句〕のように、その範囲が広く、限定に困難がつきまとうもの、また、個々の例については、関係成分としての資格が曖昧なものもみられるが、それらについては、適宜より典型的な例に立ち返って考える必要があるだろう。

Ⅲ 感情形容詞「うれし」の各成分の出現状況

ここでは、上述のような分析方法をもとに、平安和文にみられる感情形容詞「うれし」の関係成分の出現状況について若干の考察を試みたい。扱う用例は、『源氏物語』（日本古典文学全集一〜六）にみられる「うれし」全用例（二二三例）である。

先にみたような分析方法にしたがって、『源氏物語』にみられる「うれし」の関係成分を抽出し、その出現状況を調査したものが表―1である。なお、ここでは、△うれしと＋思ふ▽など、格助詞「と」によって引用を受ける例は「うれし」が心中詞として用いられたものと考え、△うれしく（う）＋思ふ▽など連用法による構文の場合は、微妙ではあるが地の文の例として判断した。（表―1参照）

ここからも理解されるように、〔感情誘発句〕は、他の成分よりも卓越して文中に表現される場合が多く、「うれし」にとしては、非常に重要な成分であるといえる。続いて、〔状況説明句〕、〔感情主体〕が多く表現されており、〔感情内容句〕と〔心地ニ（モ）〕の出現頻度はそれほど高くない。

次に会話・心中詞・地などの各文体上に「うれし」が現れた場合に、どのような関係成分を文中に伴うかという観点から、各成分の出現状況について目を向けると狭い範囲の調査ではあるが、幾つかの言及すべき点が浮かび上がってくる。表―1の問題となる点が理解されやすくなるように各成分の出現状況を会話・心中詞・地（消息・和歌については用例が僅少であるので扱わない）の別に簡単な表を作成したものが表―2である。（表―2参照）ここでは、表―1右端の各関係成分毎に調査した文体別使用度数を各文体別の総使用度数（会話70・心中詞46・地90）で除した数値が50%以上のもの◎、49%～15%○、14%～5%△、5%未満×として表示した。

表一

感情誘発句	文	26	会話	4
			消息	0
			心中詞	7
			地	15
			和歌	0
	句	150	会話	52
			消息	3
			心中詞	34
			地	59
	語	37	和歌	2
			会話	21
			消息	2
心中詞			4	
		43	地	11
			和歌	0
			会話	15
			消息	1
状況説明句		39	心中詞	7
			地	20
			和歌	0
			会話	2
感情主体		16	消息	0
			心中詞	15
			地	22
			和歌	0
感情内容句		10	会話	0
			消息	0
			心中詞	0
			地	16
一心地ニ(モ)		2	和歌	0
			会話	1
			消息	0
			心中詞	2
		7	地	7
			和歌	0
			会話	1
			消息	0

総使用度数 213

数値は使用度数

会話 70 消息 5 心中詞 46 地 90
和歌 2

〔感情誘発句〕については、「うれし」が会話・心中詞・地のいずれの文脈に現れる場合においても高い確率で表現されている。したがってこの成分は、「うれし」が出現する文体に大きく左右されることのない基本的な構成要素であると考えられる。また、若干、出現率は落ちるものの、〔状況説明句〕についても、同様に各々の文体間では、大差はみられないようである。ところが、〔感情主体〕〔感情内容句〕〔一心地ニ(モ)〕については、「うれし」が地の文に現れた場合にはある程度の分布が認められるものの、心中詞では、〔感情内容句〕〔一心地ニ(モ)〕が現れにくく、会話文では〔感情主体〕

表一 2

	会話	心中詞	地
感情誘発句	◎	◎	◎
状況説明句	○	○	○
感情主体	×	○	○
感情内容句	×	×	○
一心地 = (モ)	×	×	△

※感情誘発文・語については省略

※消息・和歌については省略

もほとんど現れないという傾向を指摘しよう。このような各関係成分の出現頻度が、必ずしも各文体の構文上の重要度に対応するとは言いがたいが、おおむね感情主体以下の成分については各文体によって必要度が異なるものと考えられる。すなわち、「うれし」の出現箇所が会話→心中詞→地へと推移するに伴って、多くの関係成分が文中に明示される傾向は強くなってゆくものと考えられる。したがって、それぞれの文構造のありかたを、ここからある程度推察することができようである。

また、各成分の配列順序は、実際にはかなり自由であり膠着語である日本語の場合、決定的な構文情報とはならないものと思われるが、ここで扱った『源氏物語』の「うれし」を含む文の場合には、会話・心中詞・地など文脈の相違に応じて若干の異なりはみられるものの、おおむね次のような程度の配列規則が考えられるようである。

〔感情主体〕+〔一心地 = (モ)〕+〔状況説明句〕+〔感情誘発句〕+〔感情内容句〕+〔うれし〕+〔思考動詞類〕

このうち、〔感情内容句〕は、さきほど述べたように、地の文にのみ現れており、〔感情主体〕は〔感情誘発句〕と形容詞との間に現れることも多いようである。先に挙げた例文L・Mなどは、一部の要素を欠くものの、おおむねこのような文型の例として捉えることができるであろう。

おわりに

おそらく「うれし」は、古代感情形容詞のプロトタイプか、あるいはそれに最も近い語のひとつとして位置づけられるであろう。したがってこの語は、感情形容詞カテゴリーの概念を明らかにする手掛かりを秘めているものと思われる。しかしながらその文構造については、未だ明らかではなく、論考もほとんどみられないようである。ここでは、狭い範囲の例にとらわれて、各々の成分の概念説明に終始したが、今後は、他の感情形容詞述語文との比較を加えて、より深い分析を行うことが必要となるものと考えられる。

〈参考文献〉

- 東辻保和「古典語感情形容詞の一視点」(『文学・語学』56)一九七〇・6
 西尾寅弥『形容詞の意味・用法の記述的研究』一九七二・秀英出版
 川端善明「用言」(『岩波講座』『日本語6』『文法1』)一九七六・岩波書店
 山口堯二『古代接統法の研究』一九八〇・明治書院
 西尾寅弥「形容詞性述語の史的展開」(講座『日本語学2』)一九八二・明治書院
 神谷かをる『仮名文学の文章史的研究』一九九二・和泉書院